

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成28年は12万5千トンとなりました。

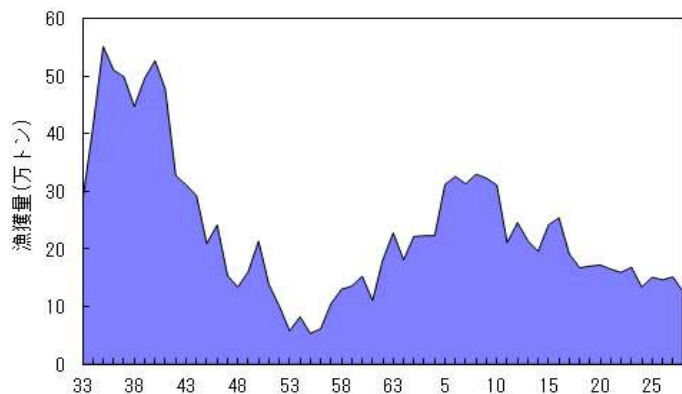


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甑島周辺、串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖、枕崎沖、野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ仔・豆（1歳魚：平成29年生まれ）主体に、期全体で1,042トンの水揚げで、前年の51%及び平年の88%となりました。

3. 県内の平成30年4～6月期の見とおし

漁獲の主体はマアジ小（1歳魚：平成29年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年並で平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターン等から予測しました。

来遊量は、漁獲量の分析により予測しました。冬漁（1～3月）と春漁（4～6月）の漁獲量に正の相関があることから、今期の来遊量は好調であった前年並で、平年を上回ると考えられます。

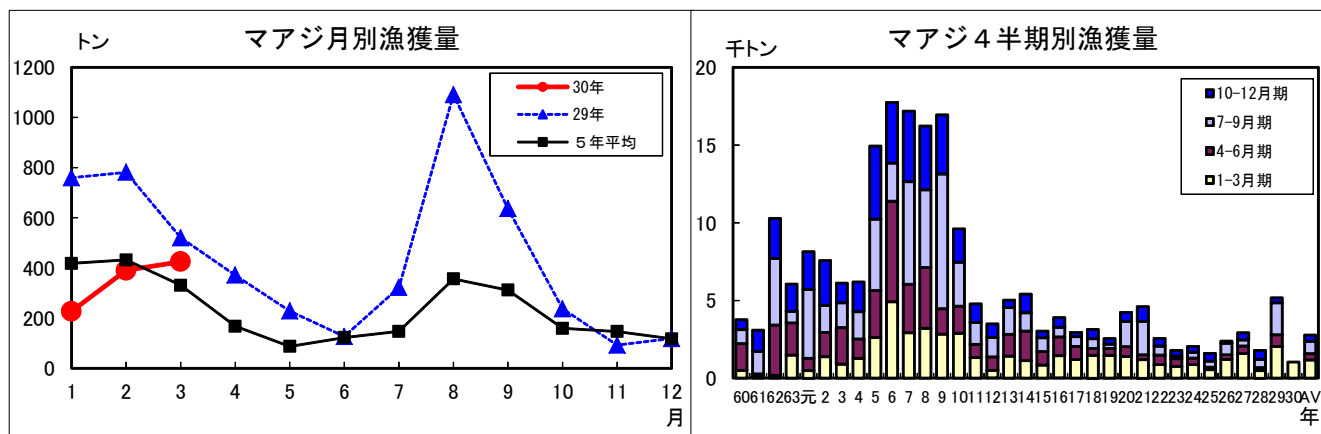


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、平成30年3月28日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成28年は50万3千トンとなりました。

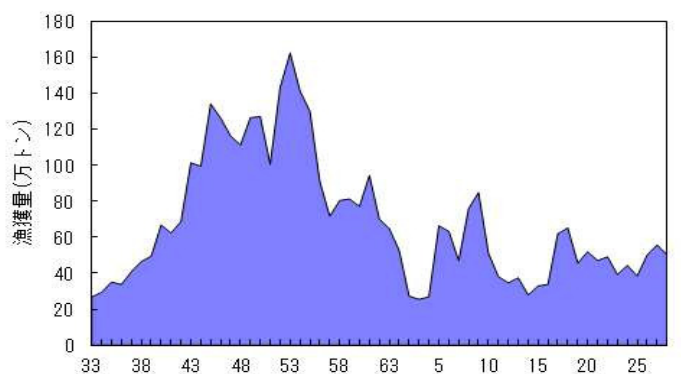


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 県内の平成30年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甑島周辺、串木野沖でサバ類豆（1歳魚：平成29年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1、2月に佐多沖、種子島東でゴマサバ大、中（3、4歳魚：平成27、26年生まれ）主体、3月に志布志沖、内之浦沖でマサバ中小、小（2、3歳魚：平成28、27年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で5,031トンの水揚げで、前年の72%及び平年の91%となりました。

3. 県内の平成30年4～6月期の見とおし

漁獲の主体はゴマサバ中（2、3歳魚：平成28、27年生まれ）で、ゴマサバ豆（0歳：平成30年生まれ）も混じるでしょう。

来遊量は、前年・平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターン等から予測しました。

例年この期間はゴマサバ中が漁獲の主体になりますが、平成29年11月から平成30年2月において尾叉長約30～32cmのゴマサバ中小、小が堅調に推移したため、今後もゴマサバ中の漁獲は継続すると考えられます。サバ類全体の来遊量としては、前年・平年並であると考えられます。

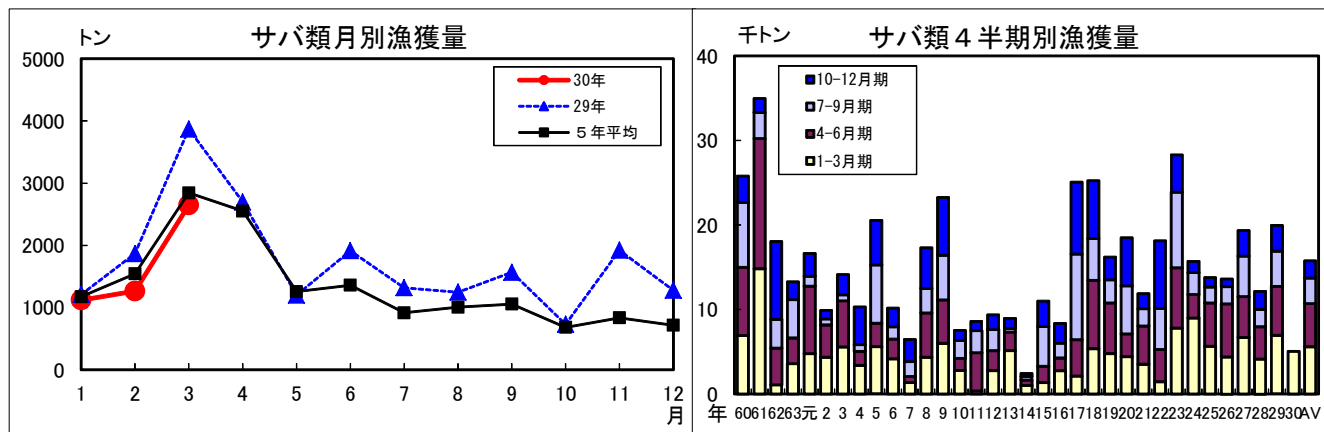


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成30年3月28日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成28年には38万トンとなりました。

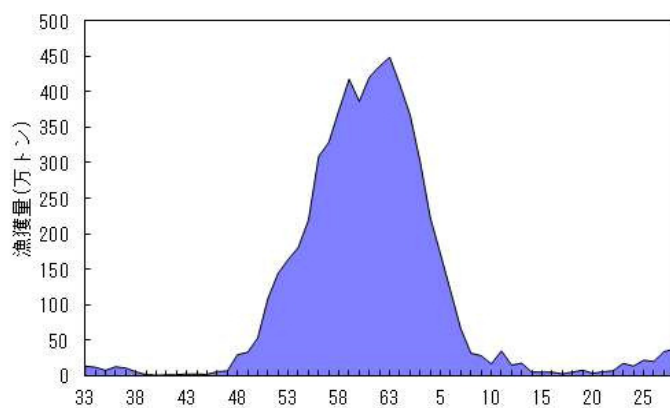


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、漁場が形成されませんでした。

薩南海域のまき網では、漁場が形成されませんでした。

4港計のまき網では、1トンの水揚げで前年の0.4％、平年の0.2％でした。

北薩海域の棒受網では、漁場が形成されず、水揚げはありませんでした。

3. 県内の平成30年4～6月期の見とおし

来遊量は前年・平年を下回り、まとまった漁獲は見込めないでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

産卵親魚と考えられる1歳魚（平成29年生まれ）は、昨年より低調な漁が続いており、0歳魚（平成30年生まれ）の加入は低調となると見込まれることから、来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

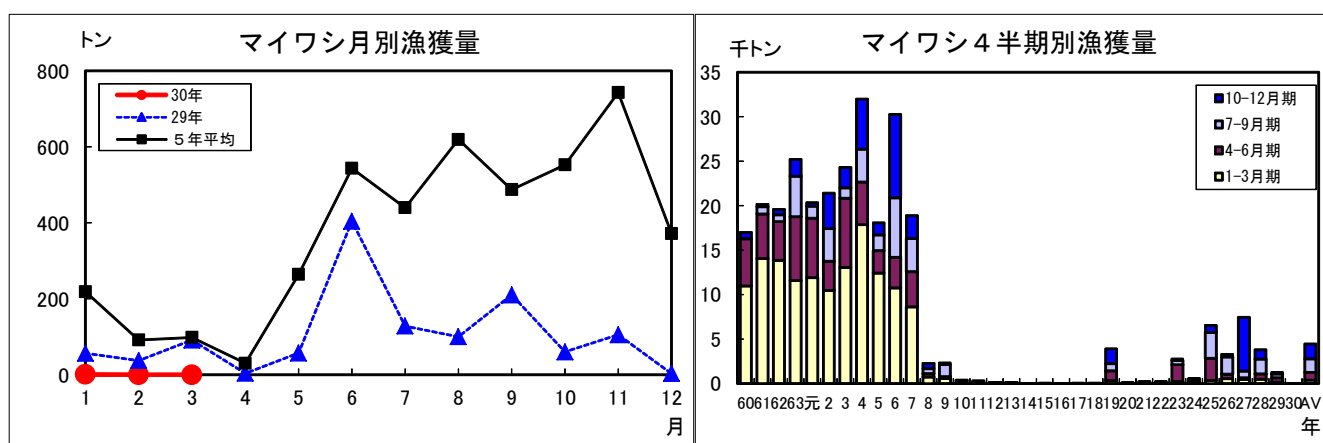


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成30年3月28日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり、高い水準を維持しています。

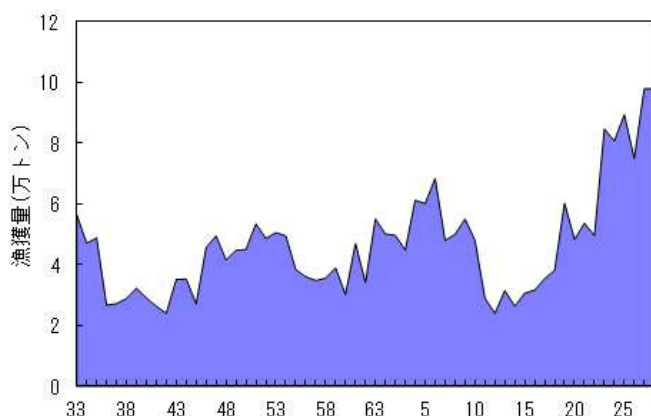


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺、串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池沖、立目崎沖、枕崎沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中羽（1歳魚：平成29年生まれ）主体に424トンの水揚げで前年の26%，平年の37%でした。

北薩海域の棒受網では、漁場は形成されず、1トンの水揚げで前年の0.2%，平年の0.3%でした。

3. 県内の平成30年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、4月の中～大羽（1歳魚：平成29年生まれ）、5月以降は小羽（0歳魚：平成30年生まれ）でしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

産卵親魚と考えられる1歳魚（平成29年生まれ）は、前期低調な漁模様であり、0歳魚（平成30年生まれ）の加入は低調となると見込まれることから、来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

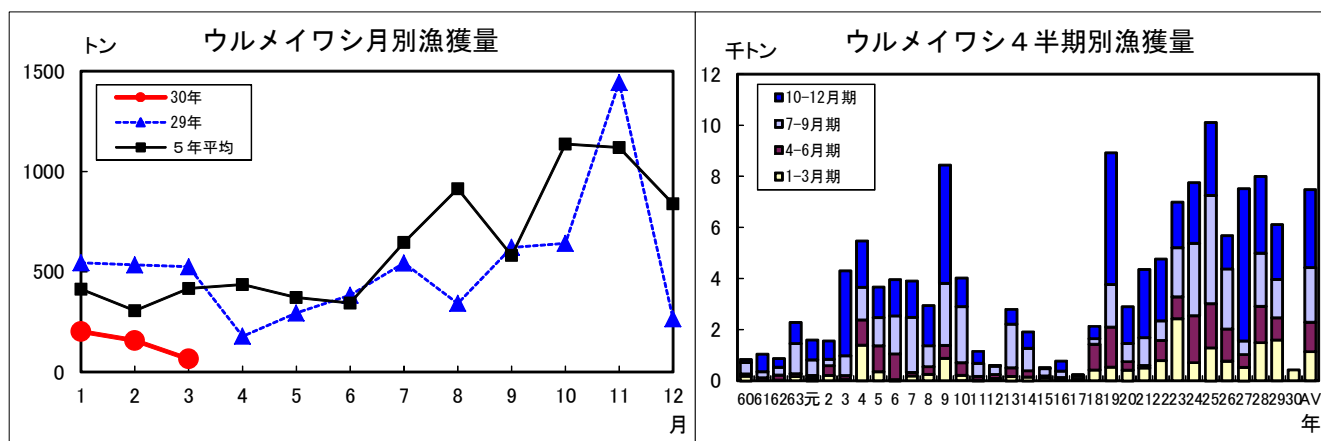


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV），平成30年3月28日までの水揚量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成28年は17万1千トンとなりました。

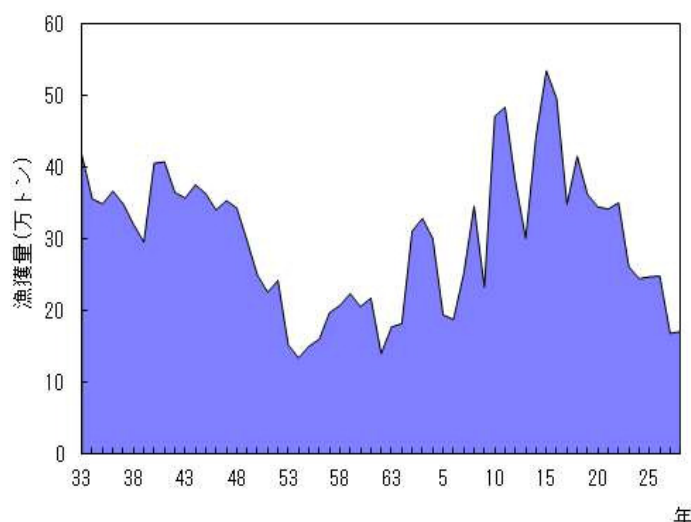


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、漁場が形成されませんでした。

薩南海域のまき網では、漁場が形成されませんでした。

4港計のまき網では、水揚げはありませんでした。

北薩海域の棒受網では、阿久根沖、長島沖、長島（内海）で漁場が形成され、160 トンの水揚げで、前年の61%，平年の124％でした。

3. 県内の平成30年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、中～大羽（平成29年生まれ）でしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる中羽と大羽の漁況は、前期非常に低調に推移しており、今後も低調な漁獲が見込まれることから、来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

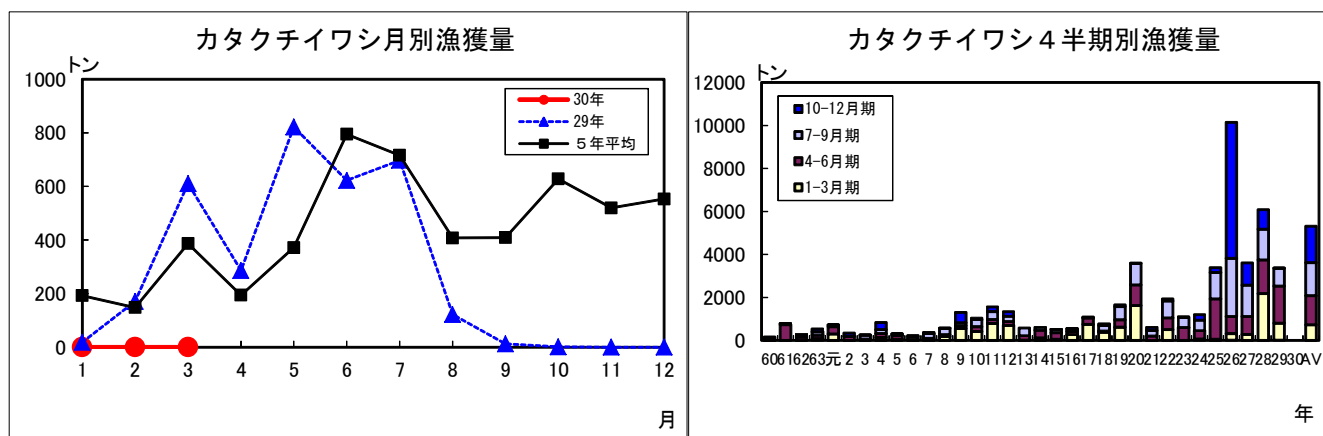


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，平成30年3月28日までの水揚量を使用

[シラス]

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後、平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、平成 29 年は 2,068 トンとなりました。

志布志湾海域では、平成 19 年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000 トン前後で増減を繰り返しながら推移し、平成 29 年は 1,007 トンとなりました。

2. 平成 30 年 1 ～ 2 月期の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス主体に 95 トンの水揚げで、前年の 53 %、平年の 174 %でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に 30 トンの水揚げで、前年の 13 %、平年の 18 %でした。

3. 平成 30 年 4 ～ 6 月期の見とおし

漁獲の主体は、カタクチシラスでしょう。来遊量は、西薩海域は前年・平年を下回り、志布志湾海域は前年を上回り、平年並でしょう。

(根拠)

西薩海域では本年 3 月の卵稚仔調査でのカタクチイワシ卵の出現状況、カタクチイワシ親魚の来遊状況から、前年・平年を下回ると考えられます。

志布志湾海域では、直近の漁模様から、低調だった前年を上回り、平年並と考えられます。

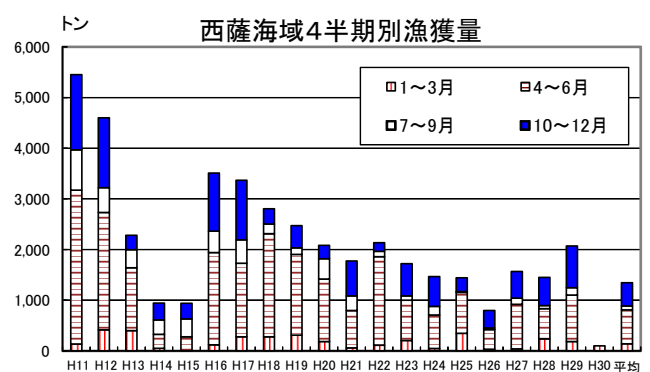
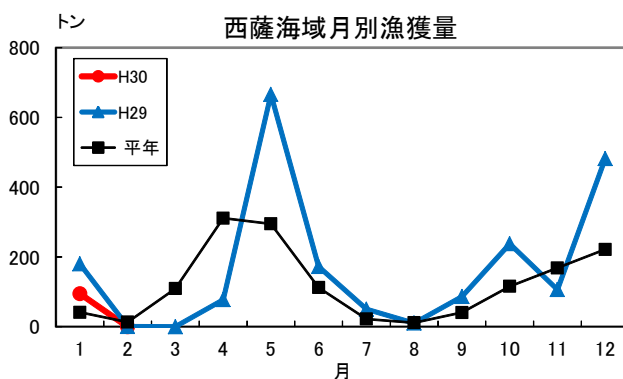


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4 漁協計)

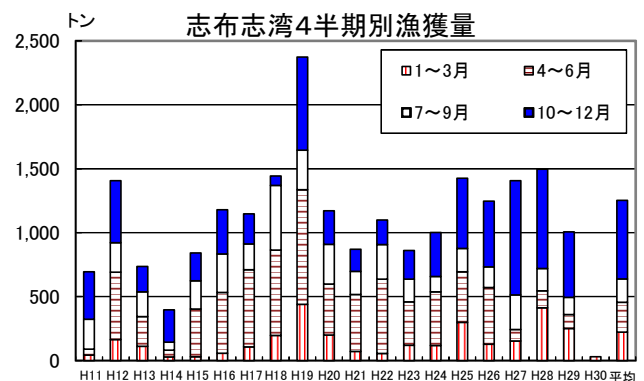
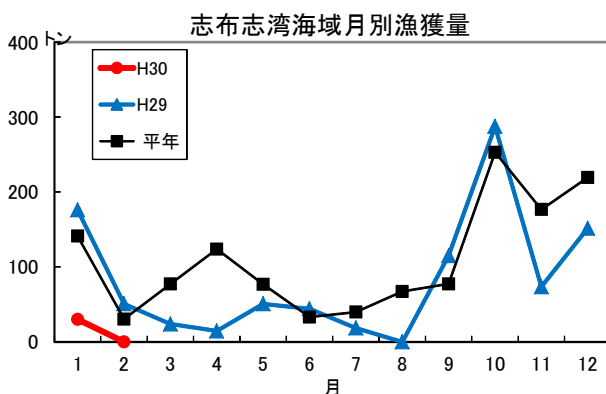


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2 漁協計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，平成 30 年 2 月 28 日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

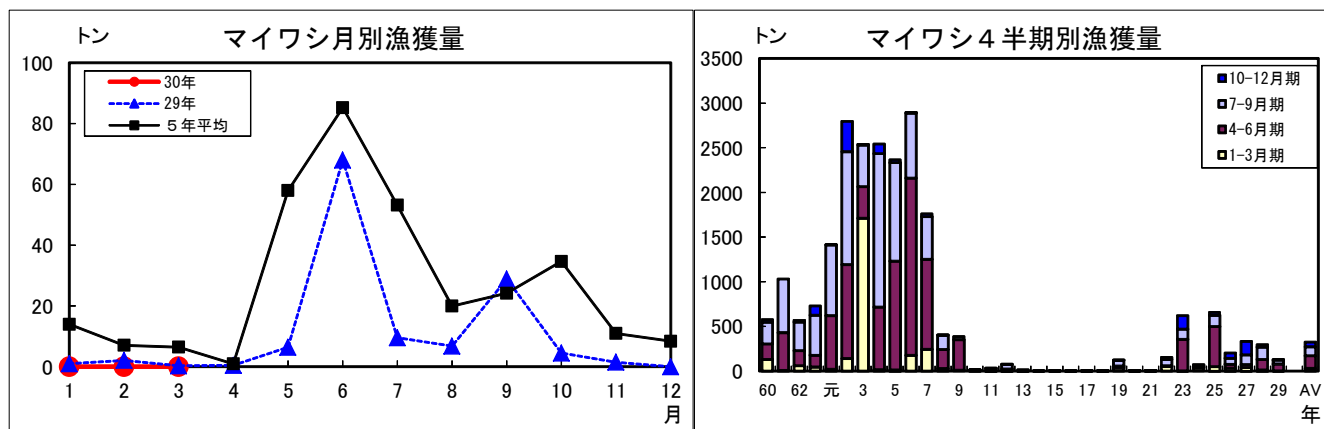


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

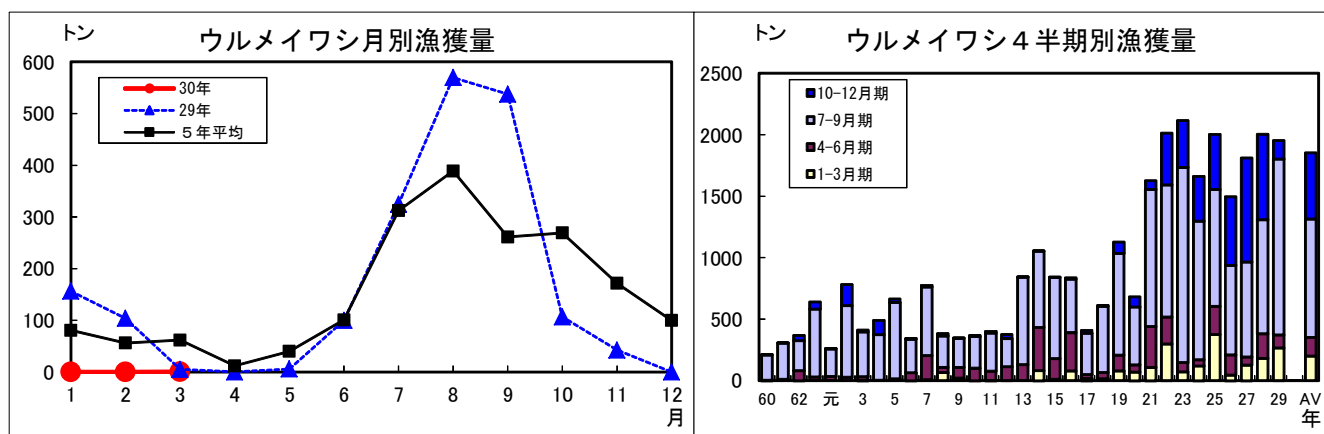


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

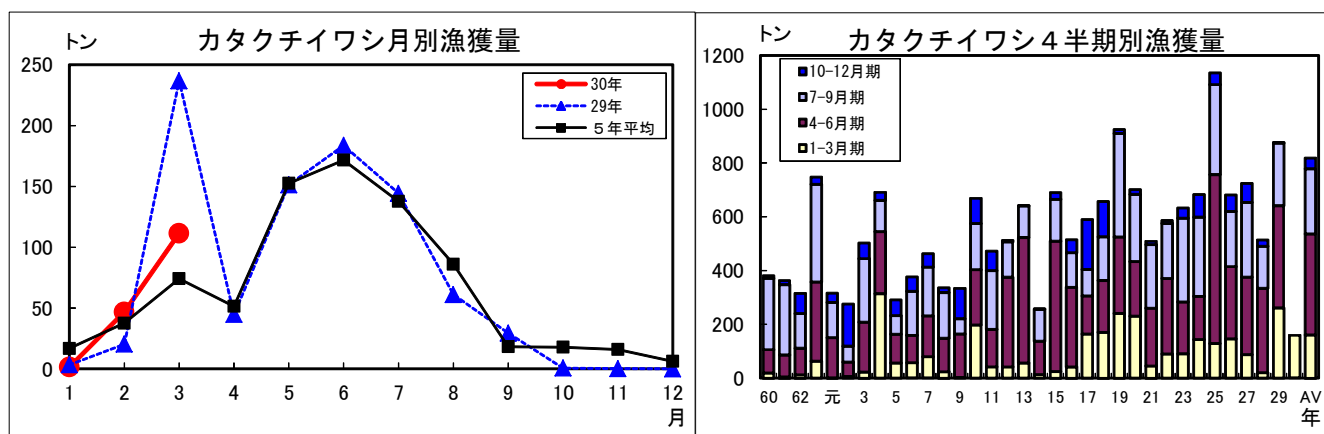


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，平成30年3月28日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成30年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トン进行ピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、平成29年は2,400トンとなりました。

4港計のまき網では、種子島南、島間沖、種子島東、西新曾根でクサヤモロ中小、小、中主体の漁場が形成されました。期全体で617トンの水揚げで、前年の92%及び平年の111%でした。

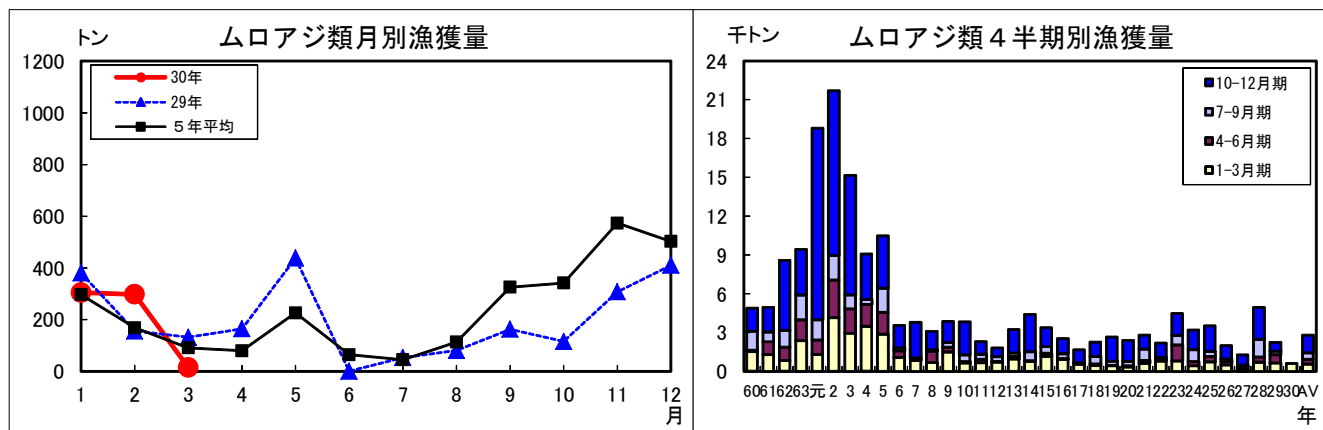


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成30年3月28日までの水揚げ量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成30年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トン进行ピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、平成29年は1,576トンとなりました。

4港計のまき網では、種子島東、種子島北でオアカムロ中、中小主体の漁場が形成されました。期全体で150トンの水揚げで、前年の27%及び平年の31%でした。

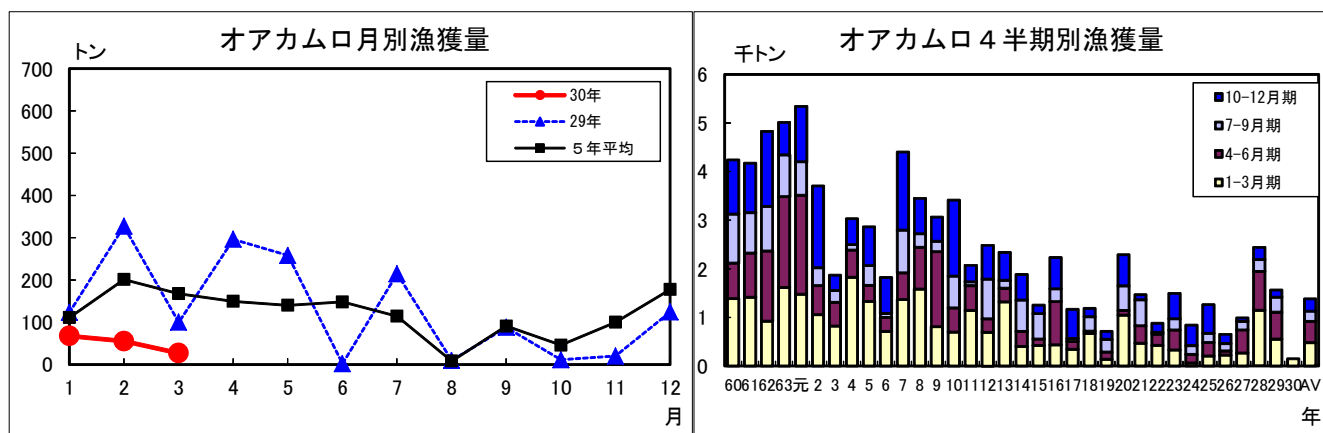


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成30年3月28日までの水揚げ量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の平成 30 年 1 ～ 3 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は，昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり，その後低調に推移し，平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが，平成 16 年以降は低調に推移し，平成 29 年は 313 トンとなりました。

4 港計のまき網では，野間池沖，甌東，串木野沖でアオアジ豆，中主体の漁場が形成されました。期全体で 179 トンの水揚げで，前年の 187 % 及び平年の 79 % でした。

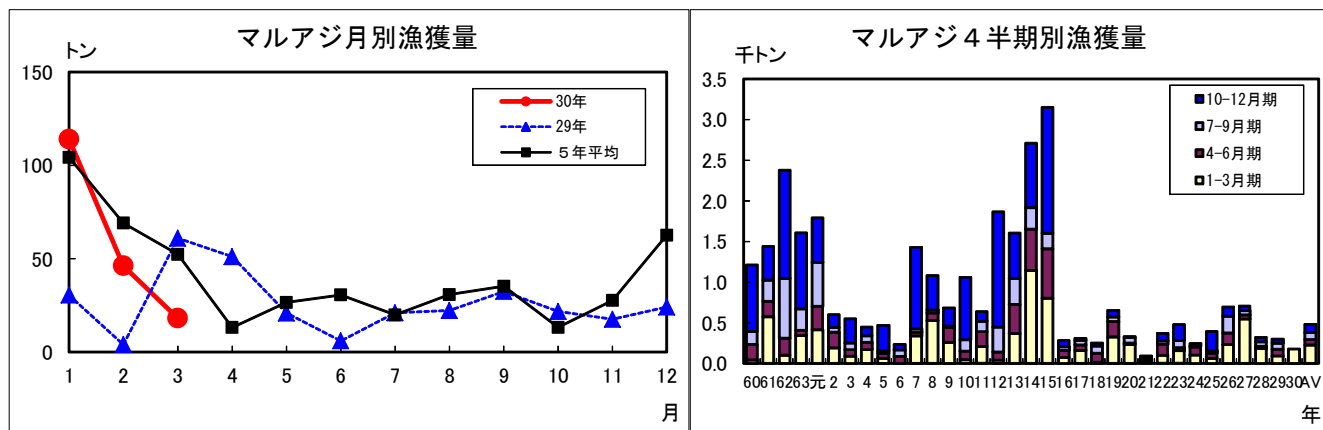


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，平成 30 年 3 月 28 日までの水揚量を使用